可失記評判

五

遠13
1701
5

1701
5

可笑記評判巻第五

第一 関郎盛昌さすがさる細工

りっぱ人のようにいそれ人の主をとりてこの国不とみぐ
り盛昌さもさくなりりゆうあいわるあいでこ主仕りもの
てやもれすぬ人一秋ゆ世ろ所ちくいひこ向ろ
こ国不所ゆぐり盛昌さもんとていもりず百姓町人
名所ていりおりて富ゆりやうもの法仕主ありな
ばほんこをりまでもこ隠こ法弟が相違ちりて
御ちりわで裏濁ぐりちりりこ隠こ法弟ちりふこ
先弟ちりりこ法内の妖怪をちりり世所ゆ人
ありとりまて富さりゆふやうもこ主ちりこ細い侍が富
さ人あわで百姓ち課仕をりけずせりりず軽ちこて

ときはかりの侍米年貢田畑しつもさせくこと年貢
ゆるされたる日ゆけばあらやうはかりして
ゆるやうに年貢とるほうこれわけ百姓ゆるやうには穀屋
物して御合くは富ひろ也ゆるゆる侍ゆ人
をもてづき給来ものくはあるいはせて責て
ちぐちぐほうは時除時乃操役とりのり年つのくはあ
つひんかのひ百姓めつらく裏潔ほうは百姓をとろ人が
をれば田畑めつくをみ〳〵ぶつ年よいみ侍乃つまりこと
形ち地をて侍ゲ富さ人めれば衣類しやうぞく物著結
侍ゆをとうら人飲食物ゆはつはうはでもあくはゆうは
支度をとうりに職人商人をもそ細とあさあひの侍
みくは御合くは富さゆうみ侍ゲをりこれば何と格でも

賞とりてもは姫料代張と海ぶれい法禁町人のつとを
とれば呂侍さ人富さ人めれいは氏おへ
ほうはれ宰人ちくみん商人百姓法華宗ぶ
み遊民人姫人までもそれく表の米小神で
さくはかはつくくとくはくを国おうぎ
りく盤昌しをを乃ぶも日本をつく餞ぶつきぷん
評日国郡おのおのわりぶを毎月市をして法商
賞とつくをすほうわげ貴づきゆうはもくく貴代
の弱きゆを賞とぶほうくをぶりはくくはくは
ぶして百姓町人侍ぶをはくくはくは
利潤をのゆはくをのづほ乃くをりすを
くぶはくをみかの系の新九市田東の町とをを

毎月十市の棚とてぐさ百姓町人は持来とり
飯米料として東耕西収のはたらき仕事
はりぐるまの田ぶんとやしてあるを一毒のわざ
つきわるきやうにやはり書はもうすしく国郡
の國裏は国をのつよきひとき地也そわはとつく
所中は侍ぐさう情をとりもつてやーはつるる
半はいさもあるべき仕不なり云化義といーーなりとど
うりあぐりめるを侍わるに仕もつくーーーーー
その表ぐつよ毒くーーーーーーーーーーーーーーー
わるかーーれとつるるくーーーーーーーーーーーー
わるーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
百姓ぐさ田畑の年ーーーーーーーーーーーーーーー
乃ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
やーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
よーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
も年ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

富る人はしらずひんなる事をしらず

第二諸大名衆窮は諸侍するの事

むかしさる人いはく諸大名衆あまりゆたかにて常に秘蔵し
すておかるべきは諸侍なるべし さらばちとにも思ひ侍る人
あるひはとかくもきこしめされずとやかくらやくもあらし
つかひ給ふは常にまかせつねに侍ぬ所なるそのゆゑに
ちかき此時の合戦にて利用なるべく さハ侍らず其
こそ主君のためには何よりも海さらにさら窮屈なりてかなき
金銀米銭なども袖あとして茶入茶器として
多くとして須弥山ほどのめからあつめてもたまりの時の用
にたゆめく立ちましきも也 但日ごろの金銀をたくしへおいて
ありて此時になりなれし諸人をまねかし海ちんよの中のけのわり

下臈のたとへて猛き膳んとてかの此喜とをもえくし織す
此念をとしにおちのくいわれど情をりもまつて
とまでしかればとてかまぼこされいそう今は思のためまた
きめつきを義にとつて糧し香餌のなかにまきを贈与ありの
手重の下に小川死するありとも也

評曰 されバたへ大名衆の軌のきつて利欲なるべくしかりとて
されバ之諸人につきて山書にあつけてちかきより此時
まさりありし諸人をまねし海ちんよのけのわりにかしの難に
たとへばとりて百の日をもつ我なくしかくどものへ
あの時に侍をよくは情にしらず百姓よりは課役ゆかりしも
らちのあやにかとかを諸侍までならいまでかれ国のさ百
姓とかしみ給ハリ思何をちかまなれびくは情からの

その日比とおのく情とりどりに手乃くゝつてうち合
振とかつて人とをつて面をい今よりうかつて沖
遠をくゆくをのみうひけをいつくをもくを色さは
かぐに敵をゝ軍をろかも遠間わるかはぞ蔵べきを
かりうかくをもあゝ時ゝうかはぐゝをよくを
中ようみゝかくをゝ也ぐんとをうゝをもをつをれて
をぐゝ也ゝ岡をうをゝをもくゝをゝ城中は
金振とを新云乃河ようをかをく近軍人とうゝを
ゝをゝ慶長きのとは邪乃年は鎌城ゝ未は近軍人
神の用をゝうゝをゝ邪をもをしず善代被官乃のゝをゝ
をもをゝれをうゝ乃をうをぐゝは日比をうつるゝ侍をでは
をうゝ乃絵をゝをぐゝ音くゝをゝ情とうををゝをつをゝ也

をゝをゝ比をうをゝ乃をゝ河くゝをゝをゝをゝをゝ近宿
をの浮思とうゝぐをゝをゝをゝは河をのぐみて
年乃ゝをゝ半とうをゝ山乃ぐゝは命とうをゝをぐゝ
勝をみぐゝくをゝをゝをゝ乃ゝをゝ城とうをゝ年第齊
のゝくゝをゝのゝぐゝ

第三世乃ゝにをゝきをゝわゝ年

のゝをゝ人のゝをゝ山ゝ世ゝをゝをゝをゝにゝわゝをゝをゝ地く。
嵐を寝ゝぐゝをゝす　螺鳳ゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝれゝ初氣
比毋系とをゝ山をゝぐゝ乃をゝ大食物乃ゝをゝ彩ゝぐゝ
く邪を乃老ゝ乃系ゝ河ゝ乃ゝをゝをゝ山ゝをゝをゝ山ゝをゝ
評曰陽ゝをゝのゝをゝを入ゝれゝゝをゝくゝゝぐゝをゝのゝをゝをゝ
きゝのゝをゝのゝ世ゝをゝをゝ山ゝをゝ時ゝゝ遠頃乃ゝ情ゝをゝゝをゝ

わかもかなふものゝ中ハ老もわかきもわかちなき世の中
のくさはたゝすもやまひありてなくなるべき物ゆへ
いかにも藏ハこれ地水火風のかりにあつまりて性をなす大日經の
字かな藏のうちにてぞ破壊人ともこれより修行ハ
又繕にまかせて藏者の德をしらせんためなるを説ち
もとより仏ハ此上の皮骨肉のうちにそなはるものを
おもず肉膏ハ豚膳のことくにて牛足よ鬚ハ麦の毛と
淵く眼ハ山雉の月のことし手又いかにして灯火おのく人
禅ありて静かなる完よりおもく食をのむ猫と見て
ハ臓ときハ通ハ退まく魂ともうつすとハいへとも糠を
めぐり渠とうまり通力を立さる事あるましく澄
ぐらし出ひるそ黒と嚙齧も。米豆此中に入て春

そらの○などもの弾ちし佛像経巻ともさとも扉とうちて
てまたげまするの首ひききたなくして鼻より出つゞ
咽とてたすてゝひめまとく乾きよわくつくまゝ扉の
よれ腐血汚ふ蠅乃手足いちくしてめりと
ありほか翻うわしてあまそゝすとまるまえとゝる
此おとる蠅ハ仲と腐しうすかの手もわすれじ乱き
おくしそ火のとく翼ハ又蟬よ卵よりもひとよ
で奥かはあつて。祥集りてそのことおとくそう
人とを陰ひ宰帝か昼を命とまつて家にを安せ
鼻をうがうちいつ周公乃万はかりたいする牛を
いちゆるかはなりゆうぬひ血は嗅を骨なて牛馬
これをいてみて耳とどうし尾とありうてかめくし

呂氏おもふにがてんがゆかずくさう〳〵魂のまき
はやおもひさるわうひハ滞之脳自汁よしらく
ゆかれ死れども飽と云しず。白きゆきハ黒き
糞そのかしぐらきゆきハ又白きをのかし西にと病
まぐむるのひろりそうしあひ金ゆき母まで含此又
ときゆす所といへる色魂子の徳と賤り忠臣の功を
みずいろものありと古人もいふてくどうされける浪
鶴之よ青蠅と罵の文あり歐陽公ゟ蒼蠅と憎の賦あ
り此の巣と至らしきのむかれハ智恵ある小児ゆゑハ
ゆうしもあらは元大食ハそのみよ禍こむつらすふ
ゆるずや此ゆ成のあらして安米とぬ頑あらじつまき
佛經の孫後利郭從が紅那よあのてもあ聽の習

氣ゆよりて無のうらをとくのゆゑに贔屓しとよや今の世
のあるきといふうわ黒きものども無くなるかりもあとめあてと
くろきよもて生れられぞ足なくてぞゆがゆる所向
よ出をとつろすまる下よ冤とよ成きあじくえのくる
引鬆がねばとおりてむかしゆきなるむまつてきおまり
此よ蛇のうそ都の卵ハそのうそうちてくちちく
初よ水中よ生じてハ子ゐ虫となりや白の気をてよ蛻
むくひしろきまりてハ云る修蛇穡と翼ゆ都めり
て一同ゆあるすれバ雷のごとくやゆとして人此方
うらでおりずてその血肉と噬くらふ觜とがりく
針の様のごとく刺と所にて血を嘬よらうくのら
よその腹ふくれたり蒸脂とつみやる袋よ卵にてつゞる

よろづ口くのうえくうこの身きまうづとうてども飽足ることを
しらずこれにもまして人と刺ハ見乃弼うる蚊わり
弱人こ身所弱脚とうづ蛇文ぶうる飽ん櫻桃
あ所てゆく饑ん柳葉乃どしてうこつてわり
賜がうを魚乃ものきま蚊ちん大ぶ名を
いつぐゆこそうのこれ蚊帳乃遥ろうり巫びく内ふ
ものへつ寢いうんとうこの耳のくまわそき知うて
ぶくこうふとうひぐ眠うこくわこうあふうのふくさ
つうこうるれ一次こうぐうこく弼ぶ乃老如弟弟
乃ゆうあうハうこ弟ぶ乃こうこいて域とうる。欲うく
して美所しぶをの身ぐつうこうあけんわうこ所
うこ所一つうひめれ蚊ぶうこ所もうこ所

うてわう力よりぐのう智恵う別い根よりず
ハうこうぐうこうてうこうこうこうみうこ。
腸癌うて大襲うりそうこうこ云人ゆうすう
利徒邪欲とうるきうこ也情まうもうこ所一
百姓とせのうりぐうこくとうゆれどこ云人みこ
のうこうぐうこうのうれぐこ也性よりぐ質乃変
こうりつうて所うこ馬変ったんぐんをつうりてこの云
ものつううふうこみうこり城狐せのうこ沢社鼠ふうこべ
うこ所ぐうこうこ半りうり山うこうこうこ所こ壽云と
いうつうこうる人ゆ宮わりしぐこ所一の一人こうこうや
こうこうこうこうこうこ狐ハ人ゆこ山うこうこ鼠ハ人ゆ
煙うこうこうこうりこうれぐこ城所一のうこ。社壇乃鼠

いろのもみぢころ乃ちくせ〳〵さすがゑど
らまぢとゝろくるさる者乃迫習うてゝうろ
ぶてとゝろつくるの事りゐまる所いなめくうえ
ゐれども社龍城狐乃ちとづきやゝうさくちゝ及
ぶとゝろつゝ舞の景ゑその旨下暴よよ同く
のゝまりく人ゝ海分よ今何とう患とすう中と暴よ
ゝゝつゝく今回命ゑゝまつりのい社龍ありか
ていゆとうゝのひへていゆゝろよくれもむこ生庶煙
ろうんとそれば社よ大此ゆそれわりゐとをそきて
死ゝんとゝまで迫砦乃ちづきんとす今者此迫習乃
ゑ初くい者氏夢くく利益とのゝゐへていゝうちう
づゝてゐつうふこきとろうんとそれで回命のさ

そざゝゝゐろ乃ちとづきやうのきい社龍乃
うきゝ人也とゝくりくるさ

第四一生家人の乃事

ひゝ弟親積福乃ゝゝ何ふくゝ生くうゝ生人いゐのく
相変よけゝゐ行ゝゐのつゝさゝとゝわりうわをちすわて
はしみ神ふゝるくゝくいくゝ七先ゝんかんゝゝゝゝす立
ゝ生ふゝ業犯つゝく欲をゝる比ちゐ力わゐゝす
信い者ゝよ分とつゝゝゝすゝちゝみゝゝゝ命と
行ゝまで用ゝうつゐ四ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
母い者ゝうんゝろうん男女ゝたゝゝゝゝゝゝ人のゐい者ゐ老ゝ何
弟ゝゝうゝゝゝゝゝゝ丈婦い中ゝゝ出汝乃ゝ汝ゝゝゝ侍
算ゝうんぐん命ゝろ貧福よゝゝゝ百姓い農作御人い

こゝ職商人ハそれ〳〵のわざをならひ智恵をもちふよしよ
佛者儒者醫者ハ学文より下まよこしず藝能者にハ
それ〳〵の名也されハもしてみな大概とこそ人死
さて〳〵いやしく侍の手ならハ老出役人ハ常み此用役人を
わりこ家の老ハ常み提けてかも此人ハ道智知れずと
こゝ役く道智知れ先あくの事なとをつらぬ大すまとん
げけ此道わくつとお程ろすお留しおの人のかよるる人
すとハかむ律とあゆるるよつぎ年ハ気ま係く此由也
さて人々ありして勝のこゝめとふりの法にて何ぞ
様乃くハ年ちくまハゆきそしよつくき実九定理
ときわきる人ならし理ずれハ非乃く信と下臈乃
ゆまごくいつに秋を理あまぢともおまはらひ法の方

まき年まゐら紀を犯めとりてハひとつありくて侍りつ
つとをおくゞ倍のの分りさうわざれさのとたすよすぬ
すまハ去まを理と犯とひとの御がりして恭依ま夫
の意理とふおあ乃年まれども人とおのそひ口編依
佐時をわず思もわく後くハ西ハ子ず血とさうきされ
気もと云しでろすとあひとも依くるもされ西口就言
あさきらしわとおやましら含とふすの年ゆかりさて
みく人乃あき人より抽とめしひ中此時を別く人要也此う
あ別をつくとあわで只今此抽とめらふすハいつ娯羨理
ぶおりうじにめとふてもくるしき母しきうきじいつ
うらんとをやる別をくしきあけきぞ殺をひつきぞその寸
まつえまり母じきゆとめくひ後悔おほせさて文人乃

よくに礼といふ物はなくてうはあたりさはりぞよからふ
乃相手此くる中よりかゝる所にて礼ともなくしたかひてを
さへ能く法しみ甚しかひ沖なくてそのやうにちりなく
甚の形く含も法しおかしされぞわか役にもなきて年中
作しおて将藤像くしてつゝひきうにようにくるにぞ
みちびき候ずばずは佐々木が花をとらしめつくすらん
ゆゑべき事なり

評曰老も既に年より抜人道習弥精をつくし役し候はゞ
其子孫年今乃世のならひ人はおしく人らずとは只一役は
わきまへずしてしかも二三役を得させ候て何くも気色を
つゝやまり役て人も役ゆゑきのは気力とれく
役をくれきものに年月をうるあれどもはあるまじき

みずからなしうして年功あるまじきみを
まさずかりしめのはかるを無用小細工なと体に候ふ
近侍まかりく前よし媚をへつらひ功をなく仕うも
あしておかしのか坊はかつる人とすこしも得たる此職也
そのかみ其の此所やまもせしかく漢の文帝こそ
やすみなく右丞相周勃に向かひて年中に断獄を
しきて銭穀の出入はいかほどありけるといふ
わざとあるよとのたまひけるに周勃さらにしらずと
ありとあるもしらずとかくす文帝又しかじかと問ひたまへど
はたく年中にいくらやの穀絹帛の銭の出入を
まうさずはしり周勃それをもしらずとまうす
ふしぎのことにみなしたまひて左丞相陳平に

つぼほ下ゆすやうこと下国郡所ゆゑもゆる所年
をのくそれ伊くにぐ所ぐ年中乃柳人飛ゑか
こをつくゑん能舎まつ海ゑ敷人延尉乃官ま
ゑ乃年也ぐ年中乃又穀絹帛のかへい内史代文
ま乃すゑり月勅い宰相代官まわづりゑゑ
百姓をあそわこ国郡をめぐみゆまいえ乃まりとと
ゑまを陰陽日時乃わ法くんぐ天文地理の則をゑを
て乃下安全乃乃をこそはゑゑを毛ゑこまず
いわやゑりまはすゑゑ中ゑわぐみこけまのゆぐ
めて乃所をこ乃ひきゑゑ也法ゑゑるそれ伊くハ
ゑぐゑりてわづきこゑわるゑつ人まゆりく乃伊と伊
行くゑ人すゑそれ四方やゑり数年ゑつゆゑあくず

次ゑ人みのゑゑりゑ物とゑ所ゑゑの別わゑつき年中ゑ
まづき人のゑをゑゑ乃ゑ氏ゑゑるゑゑぐき人のこゑ氏ゑ所
こをわざひ乃法ゑゑ人ゑ所ゑくゑゑ別をゑきゑゑ乃
命ゑをゑわぐ歌人ゑまゑ氏ゑ人ゑ所ゑ乃ゑ
まづき氏ゑりゑゑゑゑるゑぐひをゑこゑて後悔ゑれ
ど甲斐ゑゑゑゑゑ人今代ゑゑゑゑり

年人四の法をゑゑゑゑゑ中

ひくゑゑ人みゑゑ所ゑゑ也ゑゑゑ中
ゑゑ法をゑゑゑゑ乃くくき賜老ゑ男女侍信
ゑ法しゑゑの法をゑて所ゑ乃法氏ゑゑ。のゑひ所ゑて
ゑ所ゑ乃法氏ゑ所ゑゑ乃ゑゑゑゑゑゑゑゑ
ゑゑゑ氏ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

[illegible]

許曰くこれもつく袴とて公卿殿上人の
日々のつかひもの也　中古の頃の事
つくずくわれぐをうつかるべきとて人々いま
やうづくりに濁世まぢかくなりぬ袴とてはきい
ぬをつくりかりうつ唐代なりふり帝ハこの頃
魏徵とて人　常ハよみどがいなりはきぬ
ありぐりまに改じとなりまつりぬ魏徵しのく
まれるとなれば帝　殺さるべきの事なり朕を
ぢふうとをうらくうつくに常ハうつの袴と
もつくせなかゆうつ鋼と袴とてい衣冠とのく
うちとつうひてうづくべくうつ袴うり

[illegible]

ちうつ袴とて公卿殿上人とうつ
うづみうつくうつわづかうつうつわうとうつ
うあは今ひうつ乃袴とうつ袴とうつ乃ぬ
ちうつ世のひうふうとうつうつわづ韓子
どうつくちうつの人うづうつ乃袴とうつ
袴とうつく面とてうつ智ハうづうつ乃袴うつ
ぬ乃袴とうつくうつの袴ぬうつ月ハ袴とうつ
ぬうつくまハうつく袴肩とぬすうつ乃ハ通ぬ
うつのふうつくうつ迷ハとうつくうつうつ
うつ乃袴とぬうつうつ今の世の人うつうづ
濁世の智通乃袴の事ハ乃袴磨うづハ乃袴ぬ
袴ハ乃袴ぬうつ乃袴とうつの也

第六日蓮宗乃法師、惠慕八郎兵衛乃事

ひとり日蓮宗乃おとこ、ぜんの書ゝらかれてゆせん
ゝやわゝそゝと行ひいわゝみゝ仮乃ゝら井ゝゝき
わゝとゝゆゝ手ゝく法りの名をはゝゝつまあまゝつま
しのまゝとゝゝてゝきゝゆゝるひゝわゝ丑ん死乃ゝよ社
めわゝで刹利と有仮もゝゝりまゝとわゝ祇仏ゆも
ひわて

南無めゝはゝんゝのゝゝよ教あれいあゝて信とあてゝりまり

第七女系とゝつよゝ去ゝ不ゝまわゝ半
ひとゝゝ人みゝつゝゝ女系とひてゆゝみゝゝゝゝゝゝ
ゝ別わゝゝゝりゝみゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ母ゝんゝゝん邪人みゝゝゝ人ゝゝみゝ手ゝゝりのゝて

蝙蝠よりゝ人ゝ或ゝ何ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ押ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
みゝゝゝ富ゝゝ人ゝけゝゝ人ゝ。右ゝゝゝゝ砂ゝゝゝゝゝゝゝ
年ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ石ゝゝゝ吾姫ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

評曰此一段ハ小学乃七去ニ三不去乃事をとりてのへ
しるし置て評するに不及

第八段ハ上此好色をきらふへし
むかし賢人のことばに上のこのむ所に下必したがふ
とそいへるは天下の民ハみな上の好む所にしたがひ
この心をうつすものなりしかるに上たる人のかしこく
ましまさば下もおのづからしたがひ奢をやめ倹約を
まもりて政道にも背かず或ハ好色をこのみ
給ふとき下もまねびて仁政もすたれ下くだれる也
ゆゑに上の人のこのみ給ふ所の吟味あるべき也
あつかひ游山・酒宴・楽をこのみ給へばおのづから上のことし
又欲ふかく仁義をわすれ給へば下も欲ふかく仁
義をしらず一人のことく上をならふ

万民おのづからかしこくなりて無欲
をおこし慈悲ふかく義理つよく学文乃吟味をき
らはず下も又欲すくなく仁義にもとづき行跡たゞしき
味をしらぬ様にもよくありて下くらからず
堯舜乃民ハ仁にそまり桀紂乃民ハ暴にそまるといふと
あるとや

評曰此一段ハこれ一家仁あれバ一国仁をおこし一家
譲あれバ一国ゆづりをおこし一人貪戻なれバ一国
乱をおこすといふ大学のことばをひきて書より出実
もとより人のこゝろは下として上を学ぶ物なり風をうつし
俗を易るハみな上のこのむ所にしたがふゆゑなりとて
呉王剣客をこのめば百姓ども多く生疵たえず

まりハ膝乃ちからきく人はこのうきしづみしらで蹴鞠す
飢て死めかりのゆかりくはなひハ螺さらく鰻をゆへ
まとはこのめへ百姓しるしくゆひかりひハ神乃
ひろき衣はこのめでたき人乃うちなる神ちなりき
とかり地ミ國主のこのしけちらびくく銭人へ
生ばともかず事し其國が綱ちしへりとみなくめぐ
そしちつがちト國と一郷一村乃まよ低りも紅葉
みちをとこ乃え銭つんけきの下つづきておしくてめぐり
ぎらんや平乃清盛のえ。白拍子をとこのと祇王を愛
せしもしりぞ國中よ白拍子とめてわそびたのしみ
までも祇の字はつくを賞とせしことし
弟九左衛門隠の事

めしちる人此そらん小隠ハ抹茶のまくれた隠ん朝市よ
ちぐり居とふちるさしを楽ひりこく小隠とんきうしき
世の中のかれちてをくふくもみなまむのこらず事と
見じきらじとぐれみちる人へおり大隠とん朝市みけじ
ちぼとぞでも一足乃ま足へ入ねしこゆかく無人ひかれ
むつびくらしあずさればこるあへをたりちるもて是とす
せる人へおりお市之ハ半判はえる事ずのとくまさ。かざハし
き國家乃半せされぞくぐ千海とと乃道ありのみが
とゆ十年此くぐ始めりくおきそりわりやうにとく
わきうおりてん力無為無事おもバ下半よろ穏安
楽なべしけるも天下乗乃はや代十すまみをまちりろ色
ん力されはくじく妄想無念ありがりて銭穀乱

乃ゆふ物しみ後家羽織隠居頭巾砌石乃世代よ
きみのもくもかんつ　たくさあわさうのべりつを
せいぜい賞乃ゆめ

評曰大原いんきのごとくとりつくせいかいをと
めさうをとりつくせいきのむすめとのとむ
ちうれぐも銅よりたくさんつ宮ゆあづかり織とつ
さぐほうをぐいはしにのぐすゆあさぐをそ
銅市乃ゆひぐゆ浜生のぐまんとすわぐ人そのの
ゑ氏あくしてあくさぐこのかに世ゆのぐまえ
いえのくれぐゆ氏ゆつく累とすとりまに
乃韓鼎伯とつの人世ゆのぐまく市乃ゆのぐに
くれ業氏うまて醜あくまほゆ垂綾ゑみよ伯ゆ

わうゆ如系ゑうつく業氏黄くうに垂氏まをの人
とつつゆきうぐ如系ゑうみて以くくうのゑい韓鼎
伯ゑていかきうつくゆゑのゑいい價をゆうぐほゆと云
きれぐ業とうちまそくいぐくもゆくみげうせくう
とつり初め世ゆゑ氏ーゑまうくいゑくまんとす
まぐまくれぐーゑ林義ゆ行ゑのほゆいいくうゆ伯
ゑうとゑうゆーゑ伯夷叔歌ハ首陽山ゆくまに
めぐもくうのゑ氏ゑうゆゆほゆゆ歌とまて飢死
ゑまゑ文孝乃ゆ世代とつぐもゑに垂楽のすゆ銅
後ぐいぐゆ天皇乃竈房のゑハ銅よはつく
くぐとつくゆーもゆうすとうまつく後氏くゆて
居面ーゑのいうり人ゆまゑ垂ゆにうりてくれのぐ

ほまれある人もたかくなりし事も頭巾林宗によつて
大小の隠遁はさだめがたし

第十八　人まねハ盛衰ある事

むかしもろこしに九才学成漢にて長命なりし東方朔と
いふ人あり武帝の代に公孫弘といふ人もまた切果ある
ときハ武帝へつかへたてまつりその文章によりて木槿ハ夕に枯て
あしたにさくものなり人もさかへハすぐにおとろふるとうりうり
此人ハ木槿といふ花ハあしたにさきみて夕にかれてゆふぎりの
枯しものなりさかゆる事をたのみありかにかくとも
今此文帝の用る人ハ此花のあるにかく盛衰して夕つかた
わがみの枯しものとてもさこそあらめといふに又
さる人のいはく盛衰ある也長久の基

こそめでたけれとて面白き術なりや
評曰東方朔が字ハ曼倩とぞいひける漢
の武帝のときにつかへて仙術をならひ西王母とめ
ぐりあひて王母さづけし仙桃の桃七顆を帝
にたてまつりていはく此桃ハ三千年にひとたび花さき
実のなる物なるに東方朔ハ三たびぬすみてくらひ
てさかへし事あれば此ゆへに九千年のよはひをたも
ちたりといへり紀文もよくせしへなりけるにそれ
らん此世の中ハ一たびハさかへ一たびハおとろふと
いふ事ハ人ともにあり春の月盈れバやがて
かく虧るならひのハ又さかる時を待ても
なし此あすは此世の中も善悪あれとも

ゆふかげりみぢかきはいのちならず天命をもうら
らず只そのうちより心のなげきてやゝくるしみと蝶
むいかくる縁儀かりよく百年まくるなし

第十二　酒瓢と酒瓢を感る事

むかし晋人九月のあらましにわか酒瓢をきり切とつて
りりのかくし酒と酒瓢十斗ばかり是くみほしてさ
をくしるそ又絆ひとつ山酒ハこれ風ときとりりぞ
ん何事三寸のしてとゝもに是を供ふる幕也とて
はからふる此年まいつく何かの南山ならもりひ
とまかへ人かこひと頭みてよひハよつらひてはびハ
みんじ魏武帝乃短歌行をとう瘦ら華が喜
を行うすとふつりしてこの酒をとらずいりもわるか

明る年王父のごとくいかゞまこと秋乃月のごとし。一
樵乃猿萬ぞうつり獄破す百万乃蛙魔隆も可年とゐ
ずことは万年としく戈弄とわさる之し之抹和講
が詩にいかし山酒ふつ時をかきへ画しされハ山酒ふく
遊ぶくとも何にも梅やら酒乃すもわくちハあ
おきしげともひみえ事とて余うる人ゆけたみずぶく
よわるあはとちよりくこの酒と緑の窓へとかるう入ぐ
まさえ殺て鳴すかし家にへとつまとく世乃ならぬび
三河よ鶯画乃千鳥すわり来しさられ人はむさは谷ず
みかくみ地庵もしずをきたる人もゝぐやつさむさ
は徐さこし人間へのまゝしむとあるりのが向人や
人ゆわさまめる地は度さく物をりぞをするみさらく

渡りけり弁舌あざやかにして物いふ人はしつかならぬ人なりともさいくちをと
きらんば。かならず不才覚なる人をもしつくちをきかず
なるもの也。なにかにつけ利口ものゝいひかさねしさく
をときてやしなく、しゆうひ合もり是か非歟
・評曰、かうし陶淵明といふは菊をあいし酒をたし
なむ人なりしが、ある年の九月九日に酒なくてわびしく菊
の籬にあるをかゞめて、ゐたりけるに王弘と
いふ人酒をもたせてきたりけるこれを見て悦
とりてなりとてわすれて酒瓢をうつ、酒わ酔
ハならずといふ、史記に孔子の盛徳容貌あるは
ぐじしといへり。荀子に孔子のかたち聡明至知な
るこそ、まことに顔ことにつくとかくすへりこそ

てさくむさい口きくものは中々智恵にたらざるなり
大弁ハ訥のごとしといふは、弁舌たくみのかたるをん
ことばかずにくさくものやうずよく朱に室
亜なくいひあやまちなく人は吃
りて学問は寡也しとりの人中にかゝひて
学問此編にしるしたるにいふけて、さりとう
わが胸に挿まして、いつくり吃て編纂をなす
きかりは胸にそ百をつ書物のさやされ
さくせんとて智恵に別ありてもはなくなり
ものあもわるとみゆ学者智恵はかけまどもも
弁舌よく論ぎ事を合する人もおりされど酒
愚智なる人ハ首尾そろはでよし禁戒のこと

有りつるき人の地つきを一ぐれども知れあるこく
功名ひるものあり。地は一すぢとぐすに大ゆを
しる人は一言葉をくれ貴賤をふすかり
離騒よりくく人はしるべゆをもつくく善しるべ
だいくくうゆふとりつくく良しるべとつり編綸う
走人はものつるぶものつふきはあるず中しかり
とつりむさはゆくれ理はかりぐくたるみ
しるしるて人みるきしふるゆるわるあり
て生ずるるぬ酒はうつえのゆるてぶく
しるるぐくし

第十二人は畧見をぐき杖乃半

りくふ人みいつ彩そ人よ美思をゆく人よりちあるも

皇那のつ生ぬ中ゆ一ぶ人のゆるくく川くせるくくつ
うりくるくしくるゆ中ゆくくを通みくせそれぐ他人み
ゆ家ゆて古ひるつよ和氏ゆるくるゆは杖ぐ板了ぶい
いくくるつみ了ぶいくくみゆるひい通にしみるゆえ
ゆくくるぐてゆるせ半一るく人み僕盗をるぐひるくふ
ぶくくゆるぐるゆ半くくるゆ人ゆ人ゆるくくゆるくれてゆき
半とくくしくくるゆるゆくくくくくくくくい
ゆゆるぐくくくくくくくくくくくくくくくくくく
年愛みのるひるるゆ仁るいくゆ別せれ
ゆるくくいるく人みくしゆるくくゆるくくくくくゆ
ゆゆるるぐくくくくくくくくくくくくくくくくくく
て五ゆひぐ半くくるくくくくくくくくくくくくくく

陳乃楚國乃ちこれ秦の人と雖ども人民下りやすく人と邪推をなす勝れたる
劍をあらはさんとぞ思ひ給ひける人ぐはいて捨てけるひろひ
ひろひ見ればこれ人名錄を用ひて人りの所ばかりに
しるしつけて西をあらはせりてつもんとすす
ぬるとしるしの名ぐ分命とてつりてつもんとすす
ぬるとしるしの名ぐ分命とてつりてつもんとすす
ぬるとしるしの名ぐ分命とてつ

いぼくさの好くさせぬさてはこの男はあのうつくしき女の身
をうばいて我が妻にされくくと思ひをつけ
りやどにさうをあくへはされば此女さうあるべきうち
をこの男今やもうと日比巻うして彼どもみえず
彼をびさうにさやへまもみをあさくび事間ちつまて
うつくしめづらしやうのすくもうかくしとさうれてせんさく
彼くゝ帰りくをうりのの妻を取るひりむ世どのの
さわぎの妻をもうしあひい今ゝ一所のもとあず魅
手取りみよりてりてきんゆうつうあつて強人をく
不孔のいれ也と彼りをれいみとはうくきこしめ
ゆうく彼のやうちをもうひくれうくいさあうと
うて合戦と取の好くしあうの又費みあの手ちとすす

みうとおうをとりあひくれこの浮鬼として新知うを
取りうをおうみ大将鬼とうつり金銀珠玉をた奪
彼ふみをもを失恩ひうをつうん長下りやうんと亀
てはをとひの物ふひうり彼はんうつうん右
ひうん体罪科より行うのみ一とはぐあのひぐ雅
人ふ亜すうふ思ひぐ口をとうぐくみうのを也知ふ
簡恩とひ忠臣あり此家人とうて中をひ銭をみ
りぐ行りうき術とうひてんこれはれはとはうぐ
称也うくいくく基盤乃うを右とうをのうの人はみ
寛乃うあぐ体のひをのあ也とつり帝きこしめされ
ひやうきをりうと作されいやをもうもひやうあず
りうぐをくあを掠ぐうをもを費ありくく次

て夢に百ゑすぐれてうやうき年こそ人帝位半で
と問せ人いさんは呂今つくせ丸主乃法願あるよ夢
戒とくくうくみつくれてう主人うあ心これ西蘇
ちつぐうみかしひやうくすやくりけよみて面
白くつきあそぶくてそれ他半と心みかくや
ひかもむくふ人ゆくを主人と釈新他人のもう人うあ
すあ

評曰そうきくつは異是ちゐ刹ありとあ半
はくいつあくきうぐぶくきわひいはくと行ひい
くもひくきいあるくぶ山阿よいくく中後ち地
ありあるくにれうを行くせで吳人とうあ人は狂
脇之くてけくはあ百ぐわひとあり宮と城也

他美は周王ちいうあうの栗とくうず他よ
胥は呂王をいうあ白くく姑蘇臺のうしくして
麋鹿乃ちくうあ百ぐ死くうこ生涯吳人は刺と行くて
まあくぜ乃ちくさ西他あるくうあ行
ちあいうあくわぐと着ら生活ん心とくれ
くいつ人や今ちくくあ別わぜ吳人いうあ
くせぐいづきの人ありくもいでいあくぐ
華と四ちくひく半也くれりくくはくて吳とん
ちあぐあくてみのあはいみ百年孝み
仲甲ちあ人くて吳人と接くいうあ氏いう生
ぐんはうぐひあきりのうあうぐこ生ちず他よ

[illegible]

第十三　物ことはること半

[illegible]

人ごとにわくこうのあるを精進物乃御菜也る方
に料理ぐてゐるわぢ
許口年ごとに土用よりの日乃ちりこれ日ち
非家ハ雞うらぐとうるとかそれをあの落ち百文
人の祝宜元多もいに日のてとかりこれども雞完
ハちくのして祝宜ハ大勢みわぐそれ膳あち豆ず。
雞をうちくこの代物うて豆腐と笑のちめこ豆
を焼て食ち雞焼とうりと昆布とゆうて
美ちかとけよ美わぐ味も猪乃肉ハ鹿れ
ぐ狸けとうやうのよ精進の料理よ豆ゐる
とちのびくこハつもうかぬ或ハ鯨餅　鯨餅略焼
ぐのきるぐちらぐ美ちるよ鹿うは仕ちてきぬ地

それみわるかたくうちはちとりのよ牡蠣と鯛じ
てらちうかりうの膳部　輕忽ある佐乃ちはこ海
ふぐちて油うて美ぐはぐけよのちまうう
れぐかるのちきけよあらず。料理ありす。美よ
ぐ乃ちはうちうの海月ハ牛丸ちぜ乃ぐくこげ
うの牛鹿うり鶏蒲乃ちみ。雲ハひてうり
かけ。麦酒うてうのハ鯉ハらぐず。豆腐ハ
酒とちぐくちうつもうれぐ。海ぐうう鹿うは
ハうの海ぐ乃料理海ちハちうちうの
お大名ちのかう不異ありれ今日ハ精進也とて一気
もちうぐして之のうち住持乃長老ちうくせ
ちうの人のうちうちとうとちの美るハうとうとちぐうる

ちゝのぶ今日しゝえるぐこう料理はもとゆかりの
いきこゝろもとゝうるとゝり水よ湯てゝも盗見れと
ふ清ゝをのずゝ乃ゝよれくゝれても勝母とゝふ村ゝん
ゝゝぐゝるゝゝ乃ゝぐゝはこゝ生ゝの乃ゝぐゝはきゝゝひゝゝる乃ゝ地
奥ゝるれゝ乃ゝはつゝゝゝゝ妻ゝと酒やゝゝも精進ゆよゝゝるゝゝで
ゝゝ仏ゝ絵ゝ像ゝいゝゝゝゝみゝゝゝゝ

評曰此一段は法華経の草より始まりて、まづ
るたのうみのひとやうにて、とくとくいるるを
のしてうきをかしくもあり。それはさりて心を落
あがれる死々の親の、つやもち地初め高くうんて
学問にて、学問のたくみ方はかりの門を始め
ゆく賢をまつりくそ犯とかつつもとついきりの
親のくんび茶酒はゆがしているもそこ。又後段の
みな引々のかとつ。そなのくしかぐしくは茶酒
ありとつふすうやまの学問をとらべく
こなはよれつやまりもれ忠孝あり茶碗をとらべく
てうすとつづく。あるき茶碗の形ぐしく
半山陰うてはこの家地やしづと

第十五司馬徒孫の後漢の司馬徒孫とて名医人あり
ひとつの後漢の司馬徒孫とて名医人あり
万人すを問ふ弱めるよ。ふうきもそれもらこびる
ひとつ食をくまてうるとわる所人ふくくこやうこいさて世之
うてはいかとくを医の人と名ぶ人ふくくこやうこいさて世之
ふくくまてうり。みあるくくこくくくくくて世とうて法分
とぐうつもやうはうりぶ法仕方矢山の方とくくはぞ
ふくくまてうくくまてうくくまてみあるの所人ふくくまりて拙うふくじ
秘訣の独りよとくつてくくくくて法とのぐくくくくれぐ
うまてもうくくふくくまてうくくまてうくくまてう

死後乃ち生て体もなくこゝあゞやとゆふ名をよんで人
乃ち死ぬる也それとも生てゐるうちはやとゆふべきやとゆふ
こゝめくれぐとうまれてもうまれてもうまれてもうまれて
神田寄乃翁がゆゞ見みくれぐ海とのたゝ
りうそわぐこゝろうびゆふ海そのりゆふ
乃ち生ゆりゆふみ六ぶ乃ち海の絵さぶのりゆふ
とりうりみぐるゆふ見ちわぐ苦楽有る乃湯
ゐり見体をそわてうれ因縁和合乃不人体そむ
ぐきゆゆうりゆふ人ぶ何とうりそぐんぶそれぐも生
会生相乃ゆとゆふくうりめわぐ利根乃人ハ割賊
よゆち純根のゆハ生記性よゆうこ生みうるゆ
くこ文ぶ命況ゆうこ

弟十六人ゆハゆと賜ずき中
ひゆうる人ぶゆふハそれ乃人ゆゆ人ハ一束の柴ぶ唐
うりうもゆゆふゆうゆ生ハゆうゆ食服ぶ衣ゆ生
あるんぶゆうゆく記遍と解ぶゆ古人のゆうく糧粮純
ひうゆもゆゆ乃ゆうゆずとそれぐゆ粮ゆて生ゆ
ゆる時ハ空海乃手舎ゆゆゆく紙寺舎ゆずゆゆ中
ゆゆ一ゆゆゆる時ハ空海乃四昌ゆゆゆくわぐでんぐく
ゆずゆゆうゆれくゆゆゆ時ハ空海乃飲食みゆて
わぐ飲食ゆずゆゆすゆくゆゆゆる時ハ空海ぶ衣服皆
ゆゆくわぐ衣服ゆずゆゆゆ中ゆくゆゆゆる時ハ空海ぶ
財貧ゆゆゆくわゆ財貧ゆずゆゆゆゆゆゆ海ゆゆ
ゆゆる時ハ貧ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ食ゆゆゆ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

てぞんじうみ苦と苦しみ苦しみ苦死と苦あれ〳〵ぞ苦苦しうて
苦こまるとて生死治性乃元らぐひ中あるべやとの〳〵
よいろわるいこと通ん行こうけること

評曰世界はいとまつきて云わるつよいちぶんこうこの
小乗人ありうこびて世乃中此苦常を欲ゞ苦集此滅
性とはいそれゆゑ〳〵の此惑とゝぐゆゆゑ〳〵苦根とのと
めて有餘涅槃乃涅槃此ゝるゝんゝすこ此と
小乗ぶんとうづ〳〵みゆゑ〳〵乃元生死をつく行ゆゑ
ゆゑいまゝうづ〳〵元苦根とのゝの高人ゝ此大意
悪ゝ位〳〵て無餘涅槃ゝるゝんとすこ此ゝ乃
人とゝうづ〳〵わづ分づりゝ此ゝるゝんにて行ゝとりどゝ此い
新図根性とて此乃ゝ此ゝ行ゝず他人ゝ此ゝ

ゆゑ〳〵利ゆゑとゝ行ゝとゝすゝ此いこと苦薩乃大悪あるゝ利ゆゑ
佛乃ゝ此ゝ此ゝ此ゝ乃ゝ此ゝ乃ゝ此ゝ乃

こゝを菩提とつゝしむべきなり世を厭ふ人は
世を捨人はよろしきなれ一種分ぶんのこれ因縁和
合の假物なり情なきものゝ乃物つゞまるわが物と云物
なんやうわれ種分とわが物とこゝろ得しつゝわれ
種分物とこゝろ得ぬ事なしとこゝろ下心地此寺金田昌飲
食衣服財寶みな種分物とこゝろ得ぬ種分乃人なるゆゑ
こゝろ無清淨のこゝろ分みなこゝろ
うゑ人なるゆゑよろしくこゝろ利やく此大
菩提人なるゆゑいこゝろ無性なりともみちをゆく人よ
乃ぶ わかゝ人なるれハ行ぶこゝろ行ぶ
乞食ハ清淨清命乃行ぶこゝろ因縁乃因なり
こゝろすゝもわりゞゝ作しこゝろ食こゝろ

こゝろ行ぶこゝろ行ぶこゝろ行ぶこゝろ行ぶこゝろ行ぶ
地を成せしめ慳貪乃邪とこゝろ世人なる世を人と
わこゝろて物をこゝろ行ぶこゝろ行ぶこゝろ行ぶこゝろ行ぶ
物のこゝろ言葉乃中此こゝろ建こゝろ乃こゝろ
中ハ薦なりとも世こゝろ行ぶ乃こゝろ
改こゝろて人みわこゝろ裸こゝろて駄こゝろ
和尚もこゝろ一物こゝろ行ぶこゝろ行ぶこゝろ行ぶ食
こゝろ行ぶこゝろ行ぶこゝろ行ぶこゝろ行ぶこゝろ行ぶ
こゝろ世こゝろ行ぶこゝろ行ぶこゝろ行ぶこゝろ行ぶ
こゝろ行ぶこゝろ行ぶこゝろ行ぶこゝろ行ぶ乃こゝろ
こゝろ行ぶこゝろ行ぶこゝろ行ぶこゝろ行ぶ
こゝろ行ぶこゝろ行ぶこゝろ行ぶこゝろ行ぶ
こゝろ行ぶこゝろ行ぶこゝろ行ぶこゝろ行ぶ
こゝろ行ぶこゝろ行ぶこゝろ行ぶこゝろ行ぶ
こゝろ行ぶこゝろ行ぶこゝろ行ぶこゝろ行ぶ
こゝろ行ぶこゝろ行ぶこゝろ行ぶこゝろ行ぶ

第十七　用乃ゆめさめしもみな年

むかしうるはしきかの唐ちそびく雲かんだんのうち
を圖遠ゆるり稼てうへ人とうりきこゆ万乃ゆめの中に
書籍業乃おいたるこそでいとうるはしき用乃ゆ
とわるこんとて従国乃南へとゆやうさゆとうるはしき
もをわぐ分命とうるかびんかりうを人ゆのくく
そうるゆとてのてわそびいそうるゆびいみてゆさ
国と悟こうりわうる業うるゆ又ハ年ゆりうぐひうるの
うるりちのうちつまるゆうるゆ夏乃京とやちん
金仙老みとうるもえぐうさゆるゆいそうるゆされと
みうをつりのうるうよ宋とうる国ありうるのゆ北五人ゆと
めりゆうちつうれ石ゆりてり巌石とうぐうゆ秘蔵かうび

かうりてゆりうをつりうるゆをうるうるゆ
石南山ゆいゆ巌とゆりてとびゆぐり南ゆるれバゆうの石
とゆくくゆうの平にをうりゆうるゆ五人乃分と
ていわうひうぐりゆうるうるゆ物とゆうしゆるゆしとれ
うるもうゆぐうくうぐうてんせよゆくへいうの石はぐ
ゆうりうくうびゆぐうるうゆ○わうるうるうて仏乃ゆ
わうるやへうぐうゆぐ分ゆうひうぐりゆれうるうるゆ
仏うるうるうひうるゆ南へ

評曰吳国より業籍業稼乃ゆハ
ゆうるうるゆまぐうるゆ中ゆ書籍業稼乃ゆハ
国乃高へゆゆれ海乃郷ゆをうるうびんゆと
うるゆり書籍業稼ゆうるぐうバゆこゆゆるうんと

[illegible]

[illegible]

[illegible]

乃病と瘧病しのひそかにうり人をまよはせうるを
未気丹波の毒流行を未業病とつゆ一もうるを
彩雲百家の通路をふさぐ呉国乃瘧治のうるを
業病ゆ別もつてうりて今世はかりうる乃業病
あけまぐりあるあるを知らぬ日本丸諸色の
をうるてこれ有地とやしまわぐ世にらぐるあるて
うるみいちをもてれて仁義ゆをふとつてうるを呉国
北書の籠ゆわくりて中朝乃人の名をまくうり
呉国乃瘧治業病を日本丸瘧治ハ乃ゆ
こまかもつくうるて世の人ぞあるぐらは書籍業病と
も呉国のゆとゆうらりんや
ゆうりまわるゆとゆうるを

寅人とゆのんぞ中ハうらぐくたる唐日本つうへうり
わるのぐくこまわりゆ今うり日本乃ゆうをのてあうぶ
中をうるうんや仁義ゆハ八辛寅丸をうへをうるを
こまこうい国ゆわうるをあるよハ寅あるてハうれくぐるを和
あり老子乃和をしく中ゆぐこまうるとバうつと
西ぐれとうるハ西ぐるをうるゆ業ゆハ行ぐぐ
ぐくれりのをこれ中てのうるゆハ方ゆうるうるうるを
やうるるわぐうるゆうるゆ世ゆまわるう
ゆとゆうくあるくうるゆ世ゆまわるう
じて用をくゆへゆ人ゆのぐゆうゆ世あるをとうるあ
バ金銀をうるぐ金銀をくハ人ゆりゆりのハ
らぐゆうにゆるわぐゆゆうるゆをうるうるぐく

物ごと通ぜざる石自中の人半しらず回禁ろ也
次は遠石乃分半は書乃紙に遠石と見てさらに
うやわとも明ら石とちがり遠石はその文くろ
くら遠は洲くろの文は明のくらみぐく也西ろ
ろ乱とつ半ひか半いつろ物くろ也高ま
つ西書に初ろりぞわだはさ山乃手さつくまへ
也くろわぐとうさろ手くら蛤のちさ形ろ物ろり
ちくをさてろかいどの大石ろは物ぞちろ代ちさ
き石と書初てろ文をくとうさろ文章乃前
尾ろちぐし
次は人の分は半は價ろぐりれきあろわりとんに
半ろ又佛性乃半欲又ろ程乃性ろ半欲ちり

ぐろ但し亮もちろ人はようてつやしは咲ろ
莫邪乃劔とりもセもんへろいぐせん今に人の中ふ
いろ物くろ代ろくりちれて分のろに言ろか
次半ちくろぐ

第十八軍陣乃時くるてろ半

りろ老功乃人のろぐは合戦の時ろとみくを刀他
ろてろのろぐころろ乃ぐ中ぐ分を刀とろつろす
りを刀はすのしくりろきぐろ一るはちろくぐ庫
ろて素池乃と肝乃あろセよ物半ぐろき兵法ぞひ切
ちみのりぐりしをちりろちろ人ぐ一ぐ多に毛のろふ
河原毛とぐちとろいしぐ
仲日乃刀ろしは半一ろぐまろろ内甲ろあろぐし

これをしに敵よりわれ
をくくりかつをハちとくふうを
なるとまうしもゆくべ
ぐとうのりの○を結らかつ
軍陣乃門初はつ
死しのかゝ猛あるの
やぐうさしかのよ小れ
きれうみてハ敵陣
さらぐはうをもくくう
めつうき馬ハ鞍初わ
立性乃かるうを也猛
づまうのうるかぐ
黄河毛乃うはつ
ハ金性のり鞍毛

第十九　逢人と虎狼

むーうう人乃うハ
やうぐてうとう
ものうう逢人
ハ十続ーぐ
ニ虎乃りのハ十
ニ逢人ハ虎狼
ものうて人
ーくく人食
わ乃虎ゆりの
ぐうて痛の鞍のうーうやうか
ハうぐのりのうとうの
ハ虎ゆりのうハ
ハ逢人ハ虎狼
ハ十二
ーくくうう

甲斐の国の一の宮に居たりしを召しつれて、千騎ばかりにて、きさいの宮の御方へ参りたりしかども、一騎駆け出でて、行方知らずぞ失せにける。

又、源氏の方へ参りたりしかども、逆臣の誅せらるべきにてぞ有りける。

行方知らず失せにしかば、源氏の方へ参りたりしかども、逆臣の誅せらるべきにてぞ有りける。

さてもこの度、平家の方へ参りたりしかども、逆臣の誅せらるべきにてぞ有りける。

年月こそ多く過ぎぬれども、ひゆるぎの森の、いつしかもとの如くに成りぬべきにてぞ有りける。

いつしかもとの如くに成りぬべきにてぞ有りける。

此の程、遠江の国、池の田の庄、今日、

そもそもこの度、平家の方へ参りたりしかども、逆臣の誅せらるべきにてぞ有りける。

行方知らず失せにしかば、源氏の方へ参りたりしかども、逆臣の誅せらるべきにてぞ有りける。

さてもこの度、平家の方へ参りたりしかども、逆臣の誅せらるべきにてぞ有りける。

年月こそ多く過ぎぬれども、ひゆるぎの森の、いつしかもとの如くに成りぬべきにてぞ有りける。

いつしかもとの如くに成りぬべきにてぞ有りける。

此の程、遠江の国、池の田の庄、今日、

第二十人を勧賞ある事、

ひとりの人、此の人をば、人をとりて、ひとりの人、人をとりて、ひとりの人、人をとりて、ひとりの人

[illegible]

[illegible]

評曰自業自得乃理[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

作合のくまつ奥ものれいこそ忠功のうらみ知行とるの中
如此ところ半ばかりみるとくてもわりまつみ此乃しも実
うれい金銀をとりしい人は月のうち半もそこの中の海
是こまこそこうたとうふぐくのうつ
許田新田あるのわきまつ徳識財宝とぐものつ
とかの半地銭乃ごいかもいつ七度まつ乃ごぐ徳識
財宝乃ものこの形ばかりの銭まつ乃ごもの為とつてすをこまこ
次は所下北忠功の知行もの所のの中はあの半侍ら
ようこそやの日見物おかへあれどして知行もの所とて
ちひとこぶ知まつでも忠功のこと乃ものこと半あれ
次は学問い書籍ものくまこ人い福のの中は
わるびとこひ一ものりこまこ学ん学ふ

物乃ものこの形くこと学問いみものつぐこうぶこれぐ人みる
こていあるはこぐこりの人此こてはあるはこぐこと
人こありや学問とはこはもこ七こまこ武はこうぶ
こうぐ山書はこうぐこくこたここいこの形とはこく
こく形はこうぐぐぐ福わこまこ武はこ
いこのこの世乃人百半はこここりゆくぐと
扇持はここぐこの武半はこふいこ形ふのこ
ぐひこりのここりこ蝶貴福こる武はこりこく
こぐまわりとはゆこぐぐはこのぐこてここ陽こ
もこの形はここぐこのこここ仕合こ
こぐここ只物乃形のこりこわこ
もこここぐ人武こここのぐこ人武ここぐこ

昌邑王の妻乃翁とうの平わり親は高名なる人にて
親さうふこと世にあれども
聲望ゑ大軍を退じ
人の元さうふこと世に忠功ありとたくさりもうの
ゆり。項羽が毒酒を暗毒せしごとし
世の人みなはよわうぐるい月のうまごりもうわりかに
たゑ死るは七十二回とめぐりのひしごとしこれみる
三枚乃妻とふものありく妻の親を三ひかぞく
ゆわで後分に高ハ貴ようぐるくたいる強ぐるくなハ
新郎ぐるくみて親元世の人こと世にたくすとて
ともさうふ一合てくぐるくりうぐりうぐりうぐりを縁の
高高ゑ乃人とはいますべきあり

命女二ことはとやくるはこと世に高ゑ
ゆうくうく人に世にはいとはいとうとうすき
つくうり鎌て死あるるぐるくなる宰人とりてを
きりもうくはうもぐるくりうるいとて気とせくるくう
浮ゑくわりつる後悔ゆうくしるるこたに大ゑ
大ゑハ物の命とゆくくとハ殺しゆるゆわぐるくわぐら
飢て死あるる中ゑ毒酒ゑ
ゆくくばうゑ大命ゑくぐりくゆるいくくむぐ歴ゑ
ち浮ゑくりはうて世人くるくるくるく

[illegible]の扶持をとられし者共ちりぢりに
わてはなるのいとまなしなれども国郡の中一ぱい
西東にちられ[illegible]日ゆきとらるの村里ぱい裏屋の百
姓ども所死者し役ちびくとまきびくを和僻す
るとくしは袋ゆわ[illegible]表裏を用い侍の吟味をとゝ
仁義よりもいさぎよくしてもかゝるとかゝ
るとは言ひ[illegible]漏令下よりなべて日本国と
うしいまりてかくさまひかりとうとかゝ人
は富様那お貢の弁吾も及びなく阿羅ト商ぱ[illegible]
はてぐさまもぱ[illegible]ぱ足及びなく
つゝひてとゝ吟味とゝ沈ゆゝくゝとき

評曰こゝの書よりたれいづきの人
この名所ちゝぐ沈ゆつよ光りうぐ[illegible]
今ぱ拵幸人の豪ぱうゝ[illegible]
飢猿乃様よ投ぐ[illegible]
ゝづの扶持をとられ[illegible]
とすれども[illegible]
ゝき侍乃ゝ[illegible]
主元ぱ[illegible]
ゝ[illegible]侍ハぐ[illegible]
とゝ[illegible]読よ奥ぱ[illegible]
ゝくこの[illegible]
分舎[illegible]

いつもけいるとこいつゆゑ
てもそれをこのうりつ
くるものしてたのつ

角世三人とうまつべきちゑ乃事

むつこの人ゆえこのいつ人体ちゑしてこのかりと
いつぐも角一家人のゆこ人相ほとのうりけせこて
対来乃ちゑ〳〵席下。家乃ちゑつくまで茶ちゑ
ひ。ゆれせいくとそぐうちゑ也。のうりて茶
こぐ〳〵自ひちゑやうわうこそくゆくれゆ可書
七書。俳ちゑ乃業性婦はちゑ。甲陽軍鑑硬料帝
乃新ちゑうもう脇詠乃事横わちゑちうわう
う食乃湯酒ゆ同。ちゑ〳〵今ゆよちゑ〳〵ちゑ七枡ちゑ

こうこ〳〵。おうこいちゑ〳〵ぎ清。あ〳〵ちゑ〳〵。酒い樣ゆ
ゆちゑ〳〵ゆ仕〳〵ゆちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵
家花家わうこいうちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵
いぐわう人弾てちゑゆ人ちゑこれてうちゑ〳〵
ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵
わちゑ〳〵和ゆ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵
いぐ〳〵ちゑ人い矣心ゆ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵
ちゑ晨扶ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵
悪とりつ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵
茶ゆ威新ハかつ〳〵入く〳〵一樽ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵
てちゑ〳〵ゆ有ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵
いぐ〳〵ちゑ人ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵ちゑ〳〵

[illegible]

[illegible]

[illegible]

今の世にも乃て世をさかうえあらはさずに
買とりのふぐ買とりてうまくしてうまくしてうまくし

牛ちゑの野まるむらへとゆきて津国の武庫の
ひきつれたる人馬の数をかぞへつゝ数四十
わくらゝと退治しきつゝ山中にはさみ
の奥つゝみてくゝ山中にはさみ弱ゝとそ
なりもあり十磨ずとそづくといりこもりつゝ
わらへぺとりもあるゝ八十わりの弱。
のまゝつぐゝあり十ちの人へつゝ弱ゝ
てまと掃いつの用ゝ弱ゝ
弱ゝもまゝ釈海ゞいのゝ也ゝ弱ゝ紙一世の
ゝ掃とゝつぐりまゝゝ地ゝ
ゝゝゝてゝ弱ゝ